多摩川（東京都）

吉住早百合

私は小学校４年生の一年間、多摩川という山梨県笠取山を源流とし、山梨、東京、神奈川県を通り、東京湾へと流れる一級河川に深く関わることとなった。というのも、私の通っていた、私立和光小学校が１９８５年から設けている学習領域、総合学習における４年生のテーマが「多摩川」であったからだ。私自身は東京、渋谷というまさに都会のど真ん中に生まれ育ち、周りに川もなければ、山もない。ないものねだりなのか、生得的なものなのかはわからないが、私は小さいときから自然への関心が非常に強かった。学校で実施される遠足や山登りは大好きであったし、「田舎に住みたい」というのが私の願望であり、いつもこれを口にしていた。これほど自然が好きだった私にとって、「多摩川」という学習テーマは非常に興味深いものであった。私たちの多摩川学習には常に遊びの要素が付き添っていてくれたが、一小学生として多摩川から学んだことは大きかった。今回は、私が小学４年生のときに感じ、学んだことも含みながら、多摩川という川の存在について改めて考えてみたいと思う。

図１

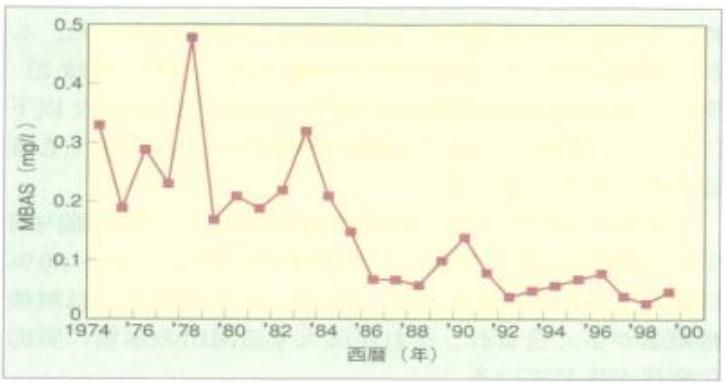

図-1　多摩川（調布取水堰）のMBAS（メチレンブルー活性物質）濃度の経年変化［公共用水域の水質測定結果（東京都環境保全局）を基に作図］

私たちは、全長一三八キロメートルにも及ぶ多摩川の上流・中流・下流が通る多くの場所に行った。行ってすることのほとんどは魚釣りや川遊びなどの楽しみであったが、私にとっては、自然と触れ合える大切な時間であった。川の中に入ることは、自然との一

体化ともいえる。あたりまえであるが、川の水は私を拒むことはなかった。それどころかゆるやかに受け止めてくれた。今となって考えれば、その寛大さは、私の心を豊かに満たしてくれていた。こうした経験があるせいか、私は中学、高校と小田急線を使って通学していたが、途中で多摩川の上を通過するさいには、必ずといっていいほど窓の外を眺めていた。特に朝の光が照らす多摩川や、夕日と多摩川の美しいコントラストは今でも鮮明に思い出すことができる。

それぞれの場所からの多摩川は、それぞれ少しずつ、あるいは大きく違っていた。まず、水質の違いは川に入るとよくわかった。温度はもちろんのこと、水の美しさなども、川に直接触れることで、実感することができた。小田急線沿いの登戸や、和泉多摩川付近の中流の流域においては、川沿いや川の中でよくゴミを見つけることがあった。最近、狛江の多摩川の近くでバーベキューをしたときにも同じことを感じた。またその透明度は奥多摩付近の上流と比べて濁っていたのを覚えている。魚も少なく、罠を仕掛けても、かからないことがほとんどであった。小学校の先生の話によると、昔、多摩川中流の周辺はもっと自然に囲まれていたそうだ。よって、中流部の水も今よりきれいであったが、人間が開発を進めるとともに川は汚れていったそうである。人間と川との距離が近づきすぎ、その結果人間は多摩川を利用し、その本来の姿、役割を奪ってしまったように思える。汚染の原因は直接的なものだけではなく、森林伐採や、台所における雑排水などという間接的要因も大きく影響しているが、これも「人間の行動による」という点では共通している。しかしながら今日では、多摩川の本来の姿を取り戻そうと活動する人々のおかげで、図１のように水質の改善が見られ、「多摩川の生態系はよみがえった」という意見さえある。

一方、自然に囲まれた上流では、川の水の透明度は高く、枝で作った釣りざおの糸の先におふをつけて川の中を歩くだけでも魚をとることができるほど生態系は活発であった。私たちは、「多摩川の最初の一滴」に辿りつくため山梨県笠取山を登った。そこでは多摩川の源流に触れたが、やはり最も美しく、清らかで、私はそこで真の癒しを感じることができた気がする。そしてあんなに壮大で、多様な顔を見せ、様々な役割を果たす多摩川の始まりは「ぽたっ」と落ちるわずか一滴であるという事実を目撃し、まさに自然の「力」を体感し、感動がこみ上げた。

私は川の不思議な力に惹きつけられる。地方に行って、川を見つけたときには、その川とふれたい、遊びたいと思う。特急列車からの景色の中に川を見つけると、必ず反応してしまう。しかし、惹きつけられない川もある。先日、長野県の温泉に行ったとき私は旅館の近くの道に立っていた観光用の地図に書かれていた川を探すことにした。行ってみるとそこには、小さなコンクリート張りの「川」があった。そこは実に静かでさみしげ

であった。川をのぞいてみても、真っ黒なだけでなにも見えなかった。私が惹きつけられた川には緑があった。あるところでは、川の中に水草が生えており、そこには生物が暮らしていた。周りは、森林が取り囲み、多種多様な野鳥たちがさえずり、飛んでいた。音ではないが、賑やかで活き活きとしていた。その中心には川があり、ゆるやかに、ときに激しくも、寛大に見守っているように感じられた。私はその、人工的な川を見て、「川」じゃないとつぶやいていた。たとえ「川」であるとしても、それは生きた川ではないように私は感じた。多摩川はずっと賑やかな川であってほしい。そしてその賑やかさは人間が作りだすものではなく自然によるものであってほしい。そのうえで人間が、楽しみや癒しを与えられ、自然の賑やかさと共存することができたらいい。

多摩川に関するホームページ

「京浜河川事務所　多摩川」

http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/tama/index.htm

ここでは様々な視点からの多摩川についての情報を得ることができる。多摩川の基礎知識や歴史はもちろんのこと、多摩川を楽しむ方法や、環境活動の報告も載っている。

「多摩川流域リバーミュージアム」

http://www.tamariver.net/index.htm

多摩川流域を大きな博物館ととらえ、誰もが多摩川の持つ価値を共有、学習できるようにしようということを前提に多摩川についての学習の紹介などが主にとりあげられている。